

---

# 守護する者

不亂剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守護する者

### 【Nコード】

N6308C

### 【作者名】

不乱剣

### 【あらすじ】

こここの世界とは別の『世界』の話。ある国では、妖精狩りが行われた。不運にも標的にされてしまった少女、『狩る方が悪い』と言って妖精に味方するハテナな青年の物語

「ハア、ハア、ハア」

少女が走る。

ザアザアと降りつける雨が少女の体力を奪う。

追われているのだ。

追っ手は4人、皆腕利きの傭兵と見える。

少女の追われる理由は外見にあった。

長いストレートの白髪もそれなり目立つのだがもっと異常なところがある。

銀色の眼、尖った耳、少女は精霊族だ。

精霊族は魔術を使える高等な種族だが、人間とはあまり仲が良く無い

自分達と違うことで忌み嫌っているのだ

少女の体力も限界に近づいてきた。

止まって息を整える。

前方の方から微かな気配がした。

顔を上げるとスミレ色の眼光が自分を捕捉していた。

ほんの少しの気配だったのだが前方1、2メートルほど前に警戒すべき存在があった。

「おい、そのガキ！お前も同業者か？言っておくが俺たちが先に見つけた獲物だぞ」

追ってきた男達のリーダー各の男が声を張り上げる。

「あんたらはこいつをねらっているのか？」

えらく低いトーンで喋る眼前の青年だが自分にはどうでもいいように感じられた。

「そうだ、言うまでも無いだろう」

「わかった」

単純な回答

その瞬間眼前の男は消えた。

というより早すぎて自分の肉眼では捕らえられなかったのだ

少女はすぐ振り返り男達を見る。

神速の青年が全員に打撃を与え吹き飛ばした。

「帰れ」

その声には殺気が籠っていた。

「!？」

「こいつう、やってしまえ!!」

蹴り飛ばされた男の間には何が起こったのかわからなかった。

抜剣し全員で襲い掛かった

青年は鞘の付いた剣を振りはらった。

鎧が割れ、剣が折れる。全員吹っ飛ばされた。

「ゲホッ、ゲホッ、グウッ、な、何故だ？」

「俺の剣は特別製でな、白金でできていんだよ。重さは他の剣と比べ物にならないぜ」

「あ、ありえねえ……そんな重いもの……簡単に振り回すなんて……」

「実際やっているんだ」

「……………」

「おい、逃げろよ。そうしないとカッコが付かないだろう」

急にフランクな発言をする青年  
男達は無言で去っていった

最後まで見えなくなつたのを確認すると近づいてくる

後ずさりして逃げる体制に入る。が。

「あーあー、お嬢さん逃げてどうするわけ？帰れるの？」

ハッと気付いた。ここまできて水の神殿に帰れるとは思えない。

「ヤツパリ、帰れないじゃん。そこで 提案がある。家に泊ま  
つていかないか？」

不敵な笑みと白い歯を見せつけられ1秒後にこちらに背を向け歩き  
出した。

それからどうすればいいかも分からずに黙って付いていった。

\* \* \*

キイイイイイイ

古い木製のドアを開ける

中には質素な家具がいくつかあるだけだ

連れてきた少女おどおど家にはいるやきよろきよと家の中を観察する。

「名前、なんていうの？」

「アルティナ……、アルティナ・ウィッチ・フォールタル」

「そうか俺はレイオ、よろしくな、アルティナ」

互いの紹介が終わったらアルティナはまじめな顔をして質問した

「……………何で助けてくれたの？」

「誰かが妖精を嫌って刺客をさしむけたんだろう？ だったらあっちが悪いじゃん追い返したほうがいいじゃん」

硬い表情のアルティナとは対照的に軽い口調で答えるレイオにアルティナは首をかしげる

「変だよ、あなたは人間と妖精を同じ扱いしてる」

「変とは何だ！ でもお前の気持ちもすこしは分かる、人間と妖精は違うところはたくさんあって区別するべきかもしれない。けど意思のある生物の行動はみんな同じ基準にあると思う。だからこうゆうことは公平に見るべきじゃないかな？」

アルティナはレイオを自分の仲間だと判断できた。自分を明かし接してくれる。自分もそうしなくてはいけないと思った。

「あなたは……」

「おい」

「はい？」

「アルティナ名前で呼べよな『レイオ』ってな」

「分かったよ、レイオ」



青緑の長髪が揺れる。

生い茂る木々と会話しながら微笑みをもらす。

十八ほどの青年は胸を弾ませ今にも歌いだしそうだった。

木々が告げてくれる。すぐ其処だと

現れたのはボロボロの小屋

見つけたと同時に小走りで駆け寄る。

扉の前に立ちノックする

「馬鹿弟か」

「やめてよ、その呼び方」

「ヤイバ……」

扉が開かれた

天使的な笑みを浮かべ

「やあ、兄さん」

\*

\*

\*

レイオは気配に気付いた。

「こいつは……」

扉がノックされた。

「馬鹿弟か」

「やめてよ、その呼び方」

「ヤイバ……」

扉をあける。

「やあ、兄さん」

「今何時だと思ってやがる」

「あ、ゴメン、早かった？」

「今は4時だ。まあいい中に入れ」

それからいろいろと話を聞いた。

旧友の事、世界の状況などいろいろ話を聞いた。

「兄さん知ってるかい？この領の国が兵を動員したんだって」

「何のために？」

待っていましたとばかりに顔を近づける

「それがね、この森にいる妖精を一掃ためだつてさ」

「それは……なんと言つか……タイミングが悪いな」  
「なんで？」

そのとき最悪タイミングでドアが開いた。

彼女は眼をこすり

「ムニユムニユ……誰？その人？」

ヤイバは呆然としてアルティナを見つめる

「アルティナ、紹介するよ。こちらはヤイバ、俺の弟分だ」

「ヤイバ、紹介するこいつはアルティナ、昨日拾った猫だ」

「……………！？やばくない？」

「とてつもなくやばい」

「ねえ、何の話？？」

アルティナの頭に疑問符がついている

「仕方がない……………」

ため息をつき話始める。

\*

\*

\*

「ふーん」

「落ち着いてるね」

「大丈夫だもん、この前レイオが私の味方だっていったから絶対大丈夫、それにヤイバさんも手伝ってくれるんでしょ？」

横をちらりと見てみたヤイバが変な表情でこっちを見ていた自分をこんな表情をしているに違いない

「別にいいけど、兄さんは？」

「その前にお前の仲間を見つけないとな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6308c/>

---

守護する者

2010年12月19日05時41分発行